

# ドキュメンタリー映画 「福島 六ヶ所 未来への伝言」 を制作して

島田 恵

今年2月に完成した映画「福島 六ヶ所 未来への伝言」は、題名の通り、原発事故の起こった福島と、「核燃料サイクル基地」の名の元に、原発の使用済み核燃料の再処理工場とともに、核のゴミの集積場となっている青森県六ヶ所村がテーマである。

私自身は、もともと六ヶ所村とのかかわりが深く、1986年のチェルノブイリ原発事故後、初めて訪れた村に衝撃を受け、写真家として取材を開始。1990年からは12年間の村で暮らした。核燃が立地される以前の村の様子、地元泊地区の漁師さんたちや青森県内の農業者たちの猛烈な反対運動、それにもかかわらず91年に推進派の知事が当選、雪崩をうったように次々と施設が建設され、全国から核のゴミが運ばれてくる過程、村が核燃マネーにどっぷりと浸かっていく推移を、一生活者としても見てきた。核燃は、環境破壊ばかりでなく、常に賛成反対で二分させられてきた村民の心の苦悩と葛藤、例えば親戚縁者でさえ冠婚葬祭以外は口も利かないといった事態や、子供たちが荒

れ、中学校でさまざまな事件を起こすなど、過酷な人間関係の破壊、地域社会の破壊の上に建設されてきた。

こうした事実が時間の経過とともに忘れられ、核燃の実態も全国的には伝わらないまま、核のゴミだけが全国の原発から押し付けられていく現状を、私はなんとか訴えたいと思い、映画制作を開始した。2011年2月のことである。その1ヵ月後に東日本大震災と福島原発事故が起こる。しばらくは茫然としたが、あらためて中身を再考し、原発の入り口と出口とも言える福島と六ヶ所村をつなげる形とした。



あらずじは以下のようなものである。福島第一原発から5キロに住んでいた大熊町の田邊さん一家は、避難先の東京で第2子を出産。ふるさとに願いを込め「福ちゃん」と名づけた。郡山市で14代続く有機農業者の中村さん一家は、放射能による影響に苦しみながら、田植えをし稲を刈る。東京に住む河原愛美さんは、原発事故後、核燃施設のある故郷の青森県

六ヶ所村をいつそう憂う。六ヶ所村泊で漁業を営む滝口さん一家は、太平洋沖のマダラから基準値以上のセシウムが検出されたために獲った魚を海に捨てる。

福島原発事故後、原子力施設があることの不安よりも、原発や核燃がなくなってしまうたら、自分たちの仕事がなくなることへの不安、村の財政が破綻することへの不安をより強く抱く六ヶ所村の人々。

こうした事態はみな、決して東北の一地域の問題ではなく、この時代に生きる私たちが作り出した結果である。私は、原子力施設を抱える地域で暮らす人々の生活と苦悩を通して、何十万年も毒性が消えない放射能という「負の遺産」を、これ以上増やし続けることの責任、未来の世代に対するこの時代の大人たちの責任を、世に問いたいと思っている。

(はまだ・けい/映画監督、写真提供も筆者。上映日程等詳細はHP <http://www.rokashonirai.com>へ。自主上映会の申し込みも受け付けています。

